

ある夜

鶏のねに驚かれけりいとし子に着せむと思ふ晴
れ衣ぬふ夜は

病める子のみとりしつゝ

知るや汝がかしらにあつるあつこほり結ばほれ
ぬる母の心を

年たつ日にかゝりて病みければわれのみ
は春の心もせざりしが二日三日経ちて熱
もさめ起きいでて羽根などつきかはすを
見て

子の病うらなくとけて長閑なる春にわが身も今
日あひにけり

愛竹

勇しく園に生ひそふ竹の子のちひろのかげの待
たれぬるかな

龜

長きよの心ならひにおのづから龜や歩みのしづ
けかるらむ

鶴

仙人に老いず死なずの薬しも汝や得にけむ千代のとも鶴

人のうしろ影をあとよりとめ行きて

行く人のかへり見せずば友かとてうしろ姿をなほやとめまし

はらから

やらじとてきほひし花もときの間忘れて笑むやはらからの仲

竹取物語を讀みてかぐや姫の生立を

手づくりの籠の目をもるゝうまし子の光みちけり竹取のやど

つまどひを

よにかたきそのことのはに吳竹のなびかぬ節はさやけきものを

佛のみいしの鉢を

をぐらやま暗き心にもとめけむみいしの鉢は光
なくして

蓬萊の玉の技を

いつはりはあらはれはてゝことの葉をかざれる
玉の枝もかひなき

火ねづみの皮衣を

燃えはてゝ名残もあらぬ皮衣おもひばかりやつ
させざりけむ

龍の首の玉を

わたつうみの龍のあぎとの白玉も玉の緒にはも
かへずぞありける

燕の子安貝を

すみの江の松にかひある身なりせば死ぬる命も
生きかへらまし

狩のみゆきをよみて帝の心を

世の外の人とみゆともかり衣かけし心はいかで
忘れむ

かぐや姫の心を

よの外はこの身ならずばかり衣きみがみゆきの
かげに添はまし

天の羽衣を讀みて

吳竹のよゝの名残も忘られて今はとかへす羽衣
の袖

あづさ弓いかでやらじと武士の守るもかひな月
の宮人

久方の天の羽衣きてかへる月のみやこに母やま
つらむ

富士の山を(翁の心を)

ながらへていかでかは見むあふことも涙にくも
る水ぐきのあと

こひくし人の涙のつきやらで湖やなりけむ富士
の高嶺に

水盤に咲きそめける支那水仙を花めづる
師の君にさよげむとても行きけるに師
の君こゝの庭なるもやがて咲きいでむと
す御身のやどもただ一本なるをなもてき
そとせちにのたまふをいなみ兼ねて花に
聞ひける

いざさらば花に問はまし汝をめぐるきみにやた
ぐふはたや歸ると

花のかへし

かへるべき路こそしらねあはれとてめぐらむ君
によらまほしさに

立禮

奥竹のたちてさゝぐるいやもなほ心をこめしふ
しはかはらず

萬葉集佳詞と云へる書を人のえさせけれ
ば

讀むふみのしるべうれしなあさりてもいづれを
たまとわかぬこの身に

議會

なにをかもことあげすらむ民のため世のためは
かる今日のまとゐに

幼な子の恙ありけるを人に負はせて共に
醫師がりゆくとして

たまばこの道のちまたにいやちたびちごをいか
にとかへりみるかな

飛行船

まかちぬきこがねど早き天をふねたなばたつめ
に一夜かさまし

圓

筒のづゝ井づゝにすめるま清水に今宵もしづく
月のしら玉

在原業平の母の老いぬればさらぬ別れの
ありといへば」に答へて「ちよもといの
る人の子のため」と云ひかはしし音をし
のびて

老いぬるも若きもしらずいづれまづさらぬ別れ
のなげきみつらむ

しら露を玉になしたる長月の有明の月夜
見れどあかぬかもてふ調べのあくよなく
口ずさまれて

てる月のひかり宿せることの葉のつゆの白玉み
れどあかぬかも

巡査

あだ人をこえはやらじと夜をこめて守れる人や
みよのせきもり

かはほり傘

くもとりのあやおりかゝる花傘にかはほりの名
は忘られぬべし

牛乳

たらちねの母のなき子もにこぐさの笑みて眠れ
り牛のこの乳に

子のいたつきをみとりしつゝ

みとりする母の心のくるしさをあはれとみませ
子育ての神

夫の熱いと高きに

枕べにより添ふむねのとどろきのそれより早し
君がつくいさ

病みつゝも手紙したためらるるがいとをかし
き筆のあとゝみえければ

なかくに臥したるまゝのあしねがきをかしき節
も君やみいでむ

あまりに次ぎく病しけるに風邪の神てふ
やわか家には宿りせるなご思ひつゝその
神に

いづこにも今はゆかなむ汝がためにいく夜あか
しゝわれとかは思ふ

花枝の君わがかたよりかぜをうつしゝに
はあらずやとのたまひし由きゝて

袖さむき風もうらみじことの葉の花の香うつす
きみがあたりは

地球

しづけしと思ふがあやし火ぐるまのめぐりめぐ
れる上にすむ世を

無着尼の君よりかへしたまはりしみ歌の
おのれとは比すべくもあらずすぐれたま
へるに

思ひやるほどもはるけしかげ高き法のみ山に澄
める月かけ

ある折

そよとだに風な誘ひそちごの目にみちし涙のつ
ゆやこぼれむ

おのれ懐にいつも入れて折々のこと書き
つくる紙をいつの間安置きたりけむ幼き
子のいざと持てきにければ

かれはてしわかことの葉のもえいでむたよりう
れしき春のはつ風

腹痛すとて家の人働みける折いりたる鹽
を當て試みよと師の君ののたまへるにい
りつゝ

病む人のなやみとくとて煎る鹽のそれよりあつ
き君が心か

わが夫都よりのかへるさいと後るゝが心
にかゝりけるにたよりありて必ずといひ
おこせし日の夜もいたく更けて早や終り
の汽車一つの望みとはなりぬ

今日とまつかひもなくして更くる夜の妹がとい
きの數をしらなむ

をぐるまのそれかと聞けばかきたえてまがふも
ねたし松風の音

かひなしと思ひしるくさりととなほたのめつ
ゝ更かす夜半かな



犬の鳴く聲しきりに聞ゆるに

かひ犬よさのみにものはとかめずて君かへりな
ばひと聲をなけ

終列車もかひなくて過ぎぬ

たのめつる心もしらでみやこ路に終の車は又の
ぼりけり

濱松のねになかれけりまつかひもあらいそなみ
の人を戀しみ

仇の腹けおきつる水雷にかゝりて口惜し
くも沈みつる高千穂艦にわが友の夫君も
乗り居ましてなき敷に入られぬ直ちにと
むらひけるその夜たゞ有様の思ひつゞけ
られてねられぬまゝにうかびいでたる

たまとしも君くだけゝり明日知らぬつゆのこの
世に光とどめて

たきものゝ香りに胸のふたがうてひらかで立ち
ぬ君が門邊に

とむらひしわれを見つゝもにこ草のえみこぼれ
たる幼な子あはれ

たぐひなき身の譽れよといふ君の膝もたもとも
しどどぬれたる

なぐさめむことの葉もちて來つる身とともに袂
をしぼるかひなさ

ぬば玉のひと夜にやせし君が面につみしなげき
の敷ぞしらすゝ

同じき君へ御香料包みけるにあまりに盛
の濃かりければうすめつゝ

君思ふ袖の涙ににもやらでこきもつらしや水莖
のあと

叙勳の辭合金鶴勳章旭日章なごうつし
の御前にたむけたまへる功の光まばゆき
に今更また涙の止め難うて

國のため惜まぬ君が玉の緒にかへしみしるし貴
かりけり

位山のぼる朝日のかゞやきてみいくさ人の末ぞ
はえある

みふれと共に沈みてしるしの品とては一
つも見いでたまはぬ由きよて

命をば君に捧げてなきがらもとゞめ得ざりしま
すらをあはれ

浦 鶴

塵の世をみぬめの浦のうらなみに仙人さびて遊
ぶ鶴かな

百舌の聲しきりなりける朝

いましめむたよりふさはし百舌のこゑふしごな
がらに語りあふ子を

幼き子のわれもとて庭清めせしあとをみ
て

いつくしき心にとりしはよきめの揃はぬみても
えみぞこばるゝ

衣に綿入るゝ折はしための手に真綿のい
たくつきて困じはてにければ

みづしわざいたつく人をあはれにもいとひはて
ける綿の心よ

たまさかに歌よみいでゝ

うれしさは身に餘りけりことの葉のはなかずな
らぬ花を折りても

かき餅をしつらひてかの地なる軍人に餅
ち餅と名づけておくるてふ由きよて

仇をうついくさのにはに幸あれとふるさと人の
送るかちもち

青島總督のうつし繪をみて

ときのまに操かへにし常盤木のあを鳥もりやお
もなかるらむ

同じ頃小學生の旗行列ありときよて

うなる子が御代をことほぐ旗つらねえみこほれ
てや大路練りけむ

開づからに醒めるはま子の君むこ君迎へ
らるゝ喜びをその日聞ゆとて

うれしさも敷そふ濱のまさごぢに幾代さかえむ
相生の松

百合子千鶴子のうち一人をことほぎの席
にとせちに望まるゝに千鶴子を遣はすと
てうかべる

花の名をおふ子もあれどことほぎのにはにふさ
はし千代のとも鶴

ある折

あさな夕なはなれもやらずめなれてもなほ笑ま
れけりちごのふるまひ

今年三つになれる子を入替の宮に詣でさ
すとして心のうちに

みとせ前はつ詣でせし幼子のぬかづく姿みそな
はせ神

そのかへるさちとせ給を求めむとて

ながれと祈る子のためうれしきは千歳飴てふ
名にこそありけれ

尋ねれど山里の便なきはそれに似たるも
見出でずさらばこのまびあられにや代へ
むとて

末ながきためしは同じゑびあられ祝ふわが子の
つとにしてまし

老人

うらぶれて老の坂ゆく人にこそなさけの杖はか
すべかりけれ

熊

荒熊のあらしになれし心には道なきみちやふみ
よかるらむ

猫

われとわが鈴の音にもたはむれて手飼の猫の罪
もなげなる

星

みづといひ火といふ星のいかなれば同じ光にみ
えわたるらむ
かげしげき光みながらまたくは星の林も風や
ふくらむ

電報

いなづまの光のまにも傳へたるたよりやなにと
胸ぞとどろく

里の子達が小川にかけし小さき水車を見て

うなる子がいかに心をめぐらして早瀬にかけし
水車ども

子等を寝させて短か夜を針運ばせつゝ

たゆまじとわが取る針ははかゆかで時のみ早く
過ぎも行くかな

明治天皇御病やまくに怠りたまへる由拜し
まつりて

大君がみ胸にあつるあつ氷とくる思ひぞまぢか
ゝるべき

ある農夫わが家に生せつる玉子を大君に
捧げむとて宮城の御前をゆきつもどりつ
しるける由新聞に見て

ま心のいかにこもれる鶴の子を君がためにと捧
げゆきけむ

病める夫の夢やすげなる夜半いと高くも
汽車の音のきこえ來にければ

安らけき君が夢路にふくる夜の車のおとの通は
ずもがな

旅なる夫より伊東の音無神社の繪葉書も
て便りおこせければ

今日もまたうれしききみがおとづれに音にこそ
きけおとなしの森

人におくらむとて風の文を認めつゝ

さちませと祈る心をする墨の色にもみする水莖
のあと

ちごのいたう泣く聲するに

つくぐとあはれとぞ聞く母こひてなくらむ聲は
わが子ならねど

犬の飼主のあとよりつゝましげに行くが
ありけり

先だゝぬ心もあはれかひ犬のたゞひとすぢにあ
るじまもりて

ものへゆきてかへるさ急げる折かには
しるを見て

ひとすぢにかへさ急ぎてゆく道を横さにはしる
かにもありけり

高角の瀝に生ひたるふで草なりとて人の
えさせければ

岩見のや名もたかつのゝ筆草に高きひじりのし
らべぞを思ふ

友より綿あまたおくりおこせしかへしの
文のはしに

見るだにも暖かけなる新綿に君がまことや幾重
こもれる

御大葬の御をりの御輩など拜さんと青山
に詣でよ

わきいづる涙とゝもに御垣内のいはるの清水む
すびつるかな

父の乗りたる汽車の過ぎて去にしとて幼
子の泣きいでければ

おくれゐて君が車のふえの音のねになきぬとも
しらすやあるらむ

黄

ことの葉のしげき世にしも口なしのはなすり衣
われや着なまし

今年七つになりたるわが子をうぶすなの
宮に詣でますとて

ことなくてなくとせへにし子のさちを祝ふも神
のめぐみとぞ知る

ある夜

そへ乳していをねぬ程の夢のまにかで都の母
をみつらむ

祖母のもとにあづけたりし子の病めり
とのしらせに

思ひやる心苦しないたつきのそのよしあしのた
いにわかねば

祖母の心遣ひを思ひて

思ひやる母もおもひてみとりするきみが心やく
るしかるらむ

熱下りぬとのしらせにも後やいかにとな
ほきづかはれて

うらやすき便りききてもあはれなほ思ひやらる
るかなし子が上

二日三日経ちぬまた熱いでゝ輕からぬい
たつきの名さへ知りぬるにたゞちに行き
てみとりせまほしきをちご二人連れてゆ
くべき身のいかにせましとまどはれて

かけりゆく鳥の翼はありとてもとび立ちかぬる
身をいかにせむ

その又の日の朝物思ひける折天井より小
さき蜘蛛の糸引きて下りぬるに

物思ふ心とくやとたのまれてあしたうれしきさ
ゝがにの糸

その日いとよき方になりぬとの便りを得
てをりしも時雨せし空も晴れ初めぬるに

さしそめし日かげと共にあはれわが心も晴るゝ
今日のおとづれ

黒

子を思ふやみになくらむ嵐ふく黒髪山の夜がらすのこゑ

金

家のかぜ吹きみだれてはいかにして黄金の花もちらでやむべき

心

ひとすぢの心もいつかあさ糸のみだれそめては果てしもどなき

寄玉述懐

白玉の光なき身はまごかなる心ばかりやせめてならはむ

手飼ひの犬のうせにければ

ゆくかたに歸る家路にしたひきて面影さらすなれし犬はも

病めるわが子をかにと問ひませる海上
師の君に

いさやがはいさともいはず病める子のとこの山
べに今日も暮しつ

鴉

老らくを知らぬ薬やむかしえてとはにからすの
羽黒なるらむ
病む人のありとふわたり心してやよむらがらす
なきもゆかなむ

世の人の夢のうきはし絶えよとてみ空をわたる
あさがらすかも

ある夜

子守歌おぼろに歌ふこゑのうちにいき安げにも
ちごぞ眠れる
ねざめせしちごを夢路にいざなひて再びたどる
文のやまぐち

一夜泊に都へゆくとして都屋の塵など拂ひ
つゝ

かくながら塵なつもりそ母のます都へゆきてわが歸るほど

逆川

かへらぬをならひと聞けどさかさ川さかさまにゆくみをもありけり

かまどの火をたきつゝあまりのけぶたきに

こともなきわが身ながらにかまの火の燃えては消ゆる折ぞ泣かるゝ

隣の家のいと静けくなりぬるに

まれ人はかへりにけらし小つとみの音もうたひの聲も絶えたる

江の島へゆくとして極樂寺坂をすぎて

ひとすぢにこゝしき坂路越えきてぞこのみ寺にはつくべかりける

巖のあたりにて何かあさらせよと海人のいふにこれも友の都がたりとその意にまかせつるにいとさゝやかなるものをあさりきていざと云ふに

からき世のなりはひとてやあま人はみるめかひ
あるものもかつがす

えぼし岩を見ヤリて

はてもなき青海原のたぐなかにたがすゑおきし
えぼし岩ども

かへるさを待ち盡らせしよと宿ごとにい
ふ聲いとかまびすし

木のめ煮てまつ聲しげし吹く風とあかぬ眺をわ
のしまの宿

なりはひを競ふもはかな江の島のあかぬ眺をわ
がものにして

セつになれる子のわが袖をひきつゝあり
くに男の兒はさばかり人にすがるものに
はあらずいざ先へ一人にてありきねと云
へど忘れては又すがりて幾度いへどかひ
なし

あはれわが心と袖をひくものはあかぬ眺めとあ
ことなりけり

わが嫌ふもの

かぐはしき花の葉かけに住めどなほ春の毛蟲の
いとほるゝかな

限りなくいとほるゝにも神つ代のむかでのむろ
や思ひこそやれ

かどさして今はた入れじ草づゝみ病の神はこむ
といふとも

子のみとりして

うつゝとも夢ともわかず病める子のまなざし見
るが悲しかりけり

身にしみてわびしきものは病める子の夢さまさ
じと氷割るおと

旅なる夫への文のはしに

子の病いえてうれしく取る筆はきみにはじめて
そむるなりけり

山岡源子の君よりいかなる筆を使ひ給ふ
など問はれける返しに

かりそめのすさびはづかし取る筆のさだめいか
にと君に問はれて

同じ君に

ことのはの花も咲けかしうるはしきつゆの玉章
うけしこの身に

答ふれば又も問はしてことのはの道しるべする
君ぞうれしき

乳のみ兒のいつのほどにか起きかへるや
うなりぬるに

雪にふす竹ならなくにみどり兒はおきかへるま
でなりにけるかな

五つ月に足らぬ子のわが顔をみてひたす
らにうち笑むは乳ほしとにや早くももの
求むることを覺えけるにやと露かれて

生ひそめしうら若竹のみどり兒もはやよになる
いふしや知るらむ

少しつゝがありて樂湯に通ふ道すがら師
の君を訪れしに道も遠ければいつも中宿
に寄りねと宜ふがうれしくて

鶯にあらぬ身にしもことのはの花のなかやど君
かさむとや

夜半に怪しき鳥の音するに鳥にやとはし
た女のいへばそれにはあらじと思ひつゝ
も旅なる人を待つ身は胸とゞるかれて

鶯の音もからすの聲もわがせこが歸らぬほどは
夜半になきかせそ

心いそぎに郵便局に行きつる折忘れきつ
るものあり今もてこむと云へばいな
きかじさ云はれしにて待ちくらしつるこ
とありすぐと云ふともきかじと云ふにさ
らばとて引き返し家路たどるとて

大方の世のいつはりにならひつゝ誠も人はいれぬなりけり

雨ふらざりし頃

馬車ゆきかひしげみ雪ならで松の葉白くみえわたるかな

千鶴子と道をゆくに彼方のうしろ姿はわが友よと云ふあまりはるかなればいかかと思ふに近よりて見ればほゝ笑みかはしてたがはざりけり

つゝゐづゝたけくらべせし黒髪や遠目ながらにまがはざりけむ

犬

ことのはを聞きだにわかぬ犬の子に門まもれとは誰かをしへし

けものなす人もある世に人ならでひとの道しるあはれ犬の子

福井の君が飼犬のいとかがしかりしが君のかくれ給ひし又の日俄に病みて失せぬときよて

まめやかに主まもりし飼犬はよみのたびにもみともせりけり

わが宿の犬まき子の君がかたにのみ行きてたゞ折々かへるやうなりぬるに

へだてなき心しりてや君がやどわが宿わかす犬のなれぬる

一夜宿れりと思へば又の日は友の方にゆきぬ

昔をば忘れずとのみひと夜ねてめでます方に又や行きけむ

又かへり來ぬるに子等のわが宿をうとみぬるよなごうとましうするに

なつかしとなでゝをやりねたまさかにかへり來にけるふるさとの宿

旅なる夫より音づれの絶えにし頃もの書くとして

とる筆もたゞ力なき妹が身と君しらすさずやたよりあらねば

補乳器求めしに惠比須神の繪のかきてあ
りければかへる道々

汝がなれむ器にかきしゑびす神ゑみてをくらせ
はしき乳のみご

狸の月見たるかた

照る月につゞみしらぶるみやびをはあれし野寺
の狸なりけり

てる月もわが世もみちしかはつゞみ浮れ心にう
つか野だぬき

都のこのみ心にかゝりて夜たちぬひし
つゞ

思ひつゞわがとる針にいなづまのたよりかよひ
て知るよしもがな

師の君の住みませる後の山を觀音山とい
へれば

み佛を名におふ山のやまかげにうしろやすくや
君は住むらむ

田に沿ひし道をゆくに若きいとせの事
ひくにあへり

ひくせこに力助けてをぐるまのあとたどりゆく
あはれにひづま

子等に昔ものがたりすとてよめる書のうち
ちすきのをの尊を

あらかりし神の心もやきたちのとけてのどけき
八重垣のみや

彦火々出見命を

みさちはやうけましにけむあづさ弓ひきたがへ
たるわだつみにして

弟橘姫の命を

もゆる火のほなかにとひしせこがためなみのも
くづと消えし君はも

神功皇后を

みいくさはかねてみえけむ香椎がたなみにわか
れし丈のみぐしに

藤原鎌足公を

折もよきみのりの庭のまり遊び思ふ心はきこえ
上げけむ

中將姫を (繼母のくだりをよみて)

紫のそのひと本をかれよとて心づよくも照る日
かげかな

渡邊綱を (羅生門)

たらちねの母とみしより世につよき心のつなも
君やゆるしし

源義家を

君が着し櫻おどしに香をそへて道もせにこそ花
はちりけめ

源為朝を

世に深き心づくしもぬば玉のひと夜にたえし白
河のみや

平重盛 (源義平との戦を)

右左いづれ劣らじ大宮のみまへの櫻のきのたち
ばな

源頼政を

なかたちし宇治の川橋もろともに仇のとりでも
こぼたましかば

佐藤繼信を

君を思ふ心をかたみくろがねのたてにもかへつ
あはれその身を

同じく忠信を

ぬぎかへし君が鏡に香をとめて花と散りけむや
まともものよふ

阿新丸を

さしてゆく佐渡のうらわのとも千鳥ともにやな
さし父こふるねに

都なる祖父よりめうがは物忘れすといへ
ばあまりなたうべそとわが好めるを知り
ていひおこせければ有難くて

忘れ草身になつみそといふ君のそのことのはは
いつか忘れむ

衣

たらちねのめぐみは同じから衣すゝしの袖もあ
つきもすそも

かり衣すそのゝのべの萩が花むらこにすりて誰
かきにけむ

ひさご

みやびをの友とこそなれなりひさごふせやの軒
にけふはかゝれど

物思へば一夜うつらくと過ぎぬるに今宵
よりは深呼吸していねましと思ひ定めて

ねむほどのいきをやよまむ今宵よりたゞなには
江のなには思はで

子等を遠足にやりて

空のむた晴れわたるらむ思ふどち野ゆき山ゆく
子等が心も

午後より風吹きたちければ

江の島の島風荒くふきたちてなみかも散らむあ
こがもすそに

筏

みやま木のあみめはいともあらけれどうら安げ
にもくだすいかだし

子のみとりしてこまれる頃大君の御聲す
ぐるなりとて人のをるがみに出づるを見
て

病める子とともにこもりてわれもまた仰がで止
みぬあまつ日のかげ

鶏

あさりつゝ何思ふらむにはつとり心ありげにう
なじかしげて

都に病める母のかたへにいねつゝ寢ざめ
して詠める

しげかりし足音もいつか静まりて物賣る人の聲
ぞさびしき

病みつゝも母がとはせるわがために夜のふすま
 の寒からずやと
 しづかなる母のねいきをうらやすみ再びむすぶ
 ふるさとの夢
 ゑみつゝも語らふ聲はかはらねどあはれやつれ
 し母の面影

ある夜

いくそたび添乳の床をはなれつゝ更くるも知らぬ
 夜半のてすさび

心ひかるゝもの

とくと思ふ道もゆかれずちごをおきてわがこし
 あとに母と呼ぶ聲

風邪にふしける子の足暖むとて

病める子の足あたゝめむ子を思ふ心にもゆる母
 のこの手に

ある晩鶯のこゑに交りてそをまれば幼子の
 の聲高く聞えきにければ

たが宿のおもひごならむいち早きねざめ知らる
ゝ 鶴のそら音は

祝ひ事ありける夢見つるに逆夢など人の
いへるを思ひいでゝ

誰が身にもさはりあらせじことほぎの夢をさな
がらうつゝにはして

ものより歸る途にていとせと見ゆる人
のあらはに手を携へてゆくに會へるにな
かく見るめやさしくて

あまさかるひなも人目はあるものを妹が手とり
てゆく人や誰

しのぶずりの歌語りのついでにふくさに
すりたるいとうるはしきを師の君の見せ
られければゆかしくて

君なくばいかで知らめやみちのくの忍ぶもちず
りわがしのぶとも

山國より出できし人濱の網引見て面白か
りきといはるゝに今日は何の魚かかゝり
しと問へば名は知られどいと小さく長さ
は指ほどにて細くやありけむといはるさ
らばしこにてやあらましといへば傍らな
る人白魚などにやあらむといふその魚な
らば今少し小さきものをとむげにいごま
ゝほしかりし心のほどへてはわれながら
聴しくて

争ひし心すべなみいをの名のしこてふことをわが身にぞしる

十二になれる子のくりやのわざ何くれとわが手助くるやうなりぬるに

袖にのみすがりし吾子もわがために清水汲むま
でおよすげにけり

折にふれて

眞柴たく伏せやならねどわが心くゆることのみ
しげき頃かな

はした女をやどにやりて廻り清水くみつ

手もたゆくむすぶ清水にいたつきし人の心ぞい
とどくまるゝ

いと深き堀井なれば少しくみやりてむとて夫のわが手助けらるゝに

とる筆をしばしおきてもわがために筒井の清水
きみがくませる

母よりの文を見て

うれしさにとどめもあへぬひとりゑみ人やとが
めむ母のおとづれ

うれしきもの

とせへてあひみし友をなつかしみつぎてこぼ
れぬ笑も涙も

人の語らふことの何ならむとふと心のと
どめらるゝに

耳なしの山の椎柴しひてなどきかむとすらむ人
のことは

ものへたざる道すがら

日かげさす瀬戸にさむしろかたしきてつゞれさ
す身ぞ思ひなげなる

わか子と二人瀬邊をゆくに寄せくる潮に
ふと道の絶えて心ざす方へゆきもやられ
ず困じ果て

鳥ならぬ身をいかにせむ浦つたふこのはなれ洲
に橋もなくして

折にふれて

ことのはの花したふ身はみにそへむきぬの匂ひ
も思はざりけり

くさめといふものゝ續きていでぬるに

かひなさをかこつ思ひもあるものをなほかけ事
や人のいふらむ

親しき友のかへさを送りて後

あくがれし春のすぎけむ心地してかへりし友の
なごりこひしも

かぜの心地にてやめる子等二人いれさせ
て

ことのはをさそひかはして病みつゝもつれぐ
ならず見ゆるはらから

嬉春會の榎本えつ子の君より「春までど
君きまされば梅が枝に鶯なかぬ心地こそ
すれ」などみ消息ありければ

ことのはのかれて色なきやどをさへうとみもは
てぬ春のうぐひす

ひな雀むれつゝ集立つくれたけの林のやどをい
でがてにして

この頃いとゞ歌の思ひいでずなりにしを
今日二つ三つ詠みいでゝ師の君にみせま
つるとて

はかなしと君や見るらむたまさかにうかびいで
たるなみのうたかた

雨のいとほげしかりし朝子を學びやにい
だしやりて

降りすさぶ雨のあしにもさはりなくとく學びや
につきねとぞ思ふ

物思ひわびける頃幼き子のなにもく母な
らではと慕ふに

世のちりとうとまれはてむ身なりともわが子ば
かりや心へだてぬ

住みなれし扇ヶ谷の宿を今日しも家移り
すとして

思ひきや花ゆゑしめしこの宿を春まらあへずう
つろはむとは

もとの住家は竹の林ありしがこゝは松の
み立ちつゞければ

吳竹のかはらぬやどはかへしかど縁はおなじ松
の下庵

いと古き家なれば

古への黒木の柱よゝをへてわが宿にのみこの
とぞみる

嵐の日道をゆきて

あらしふと風や思はひよしさらばぬるとも傘は
さゝでゆかまし

家移りせし折もの商ふ人のわれこそ得意
にせめと競ひ來るがうるさくて

うつし植ゑし一むらたけにむら雀ねぐらあらそ
ふ聲とこそきけ

晴れたる日こゝに遠足しけりと見ゆる生
徒の停車場に集へるを見て

をぐるまにのりてかへりてたらちねにさゞげむ
今日の家づとやなに

百合子の金澤に遠足してあさりな十ばかり
持ちかへれるに幼き厚の父にも一つ母にも
一つと汁の實にそへ入るゝもなかしくて

一つづゝとるもむつまじし十ばかり子等があさり
しこのあさり貝

まれ人に飯すゝむる折し幼子のわが側は
なれぬにふとかの「風と波とは思ふどちに
やあらむ」てふことのはも思ひいでられて

吹く風となみならなくに立てばたちゐれば又わ
るわが子をかしも

大相撲のこの里にかゝりしときとけるこ
ろ

魚うりも魚おきすてゝ今日ときくすまひのには
にいそぐをかしさ

師の君よりいとめづらかなるみる貝て
ふ貝を贈はりければ

君をしも見るかひありと思ひしをなほたまもの
ゝ名さへひとしき
子等もみなみるかひありとさゝめきてこのたまもの
ゝあたりはなれず

木

山深き信濃の國のつとにせばよにみるかひぞあ
るべかりける

折にふれて

ふたおもてありとしられて國にたつこの手がし
はやおもなかるらむ

みる貝の殻のいとめづらかなれば國にか
へらむ折持ちゆがまほしくわれにたまへ
と雄太郎のいひければげにとて

かひもなき身とやすてなむわたつみのひろき心
のわがせならずば

坂師の君が還曆の御賀に

あゆちがたよせてはかへる年なみのかぎりもし
らじ君がさかえは

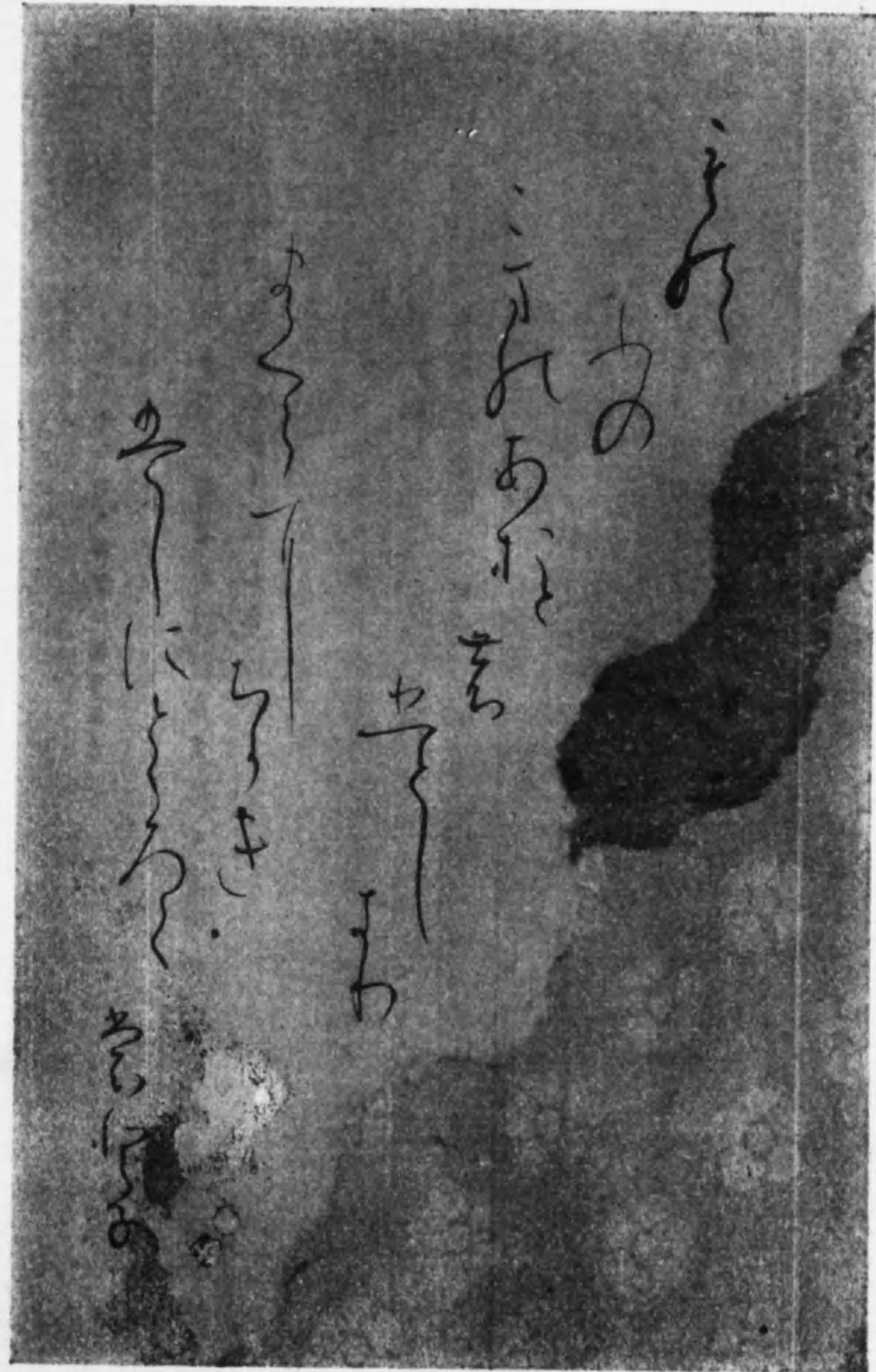
年たつ日産室に籠りゐて

たれこめし身もあけがらすはつすどめへだてぬ
聲をきくぞうれしき

松竹にちなみも深きみどりごとうぶやに年を迎
へつるかな

つれごととわれとわが手にみいりつゝ年たつ今日
をおくる日ながさ

來むといふ母をまつよりすべのなきわれと知ら
でや君がきまさぬ



初荷ひくものとはしるくゆきかひのあがきもい
さむ駒の鈴の音

この年も七日すごしてみぬまゝにとりのぞかる
門の松竹

母の歸らむといひし日米の齡なる風交を
しのびて

いまはわれ母をばとめじ都べにみつはぐみつゝ
待つ君あはれ

うぶやに籠れる母と子を懸ろに看護して
花子ぬし「すこやかに生ひたちませや神か
けてわれも祈らむさちふかき世を」とみど
り兒に別れを惜みて詠まれければ

生ひいでゝ行く末ながきみどり子と共にねにし
はたえじとぞ思ふ

わが子のいたつきをみとりしつゝ

心さへ共にくだきて病める子の頭にあつるあつ
氷かな

くだく手にふるゝ氷にくらぶれば岩井の水は湯
とぞおぼゆる

わがたのむくすしの今ぞ來ますかと車のすゞの
音のみまたるゝ

この日都なる母よりうち描ひ悉なきや心
したまへなど文ありければ

神ならぬ君はいかでかしらまゆみ起きふしなや
むことし告げねば

あまり病の長引けるにいづこの醫^{くすし}よし
など人より聞きてはしなくも心まどひし
つゝ

西東よしやあしやと子ゆゑには思ふ心のはてぞ
しられぬ

生れにし子の八十日あまりたてる頃いだ
きつゝ歌へる

生れいで、百日に足らぬよねのかすよはひもひ
さに榮わよやあこ

世にいでしわが子はいまぞ百日ぐさはや近から
し花のゑまひも

祖父に袖無しつくりておくとて

世のうさを包みし袖のなき衣はうれしさのみや
身にあまるらむ

日能久子の君が喜の字の御賀に松年久し
といふことを

音にきくはまならねどもすみよしと松葉が谷に
千代へますらし

大正こゝのとせといふ春山口時子の君重
を去りませりとの知らせにいと麗かれ
て君がやかたへと心ざす折春雨しきりに
降りければ

春雨の涙にぬれてさくら花散りにしやどをとふ
ぞ悲しき

夫君の悲さはつゝみましてなか／＼に難々
しうふるまひ給へるがみ心のうちいかば
かりとおぼえて

なみた、す上は見ゆれどわだつみの深さしられ
ぬ君がなげさか

ますらをの君しもあはれ聲たてゝ泣かばしはし
はなぐさましを

み心失せはてしやうなる母君になぐさめ
まつらむことのほもなくて

つらき世の涙にたへし君がみにたへぬや今日の
思ひなるらむ

いで心さやにもちてよこのやどの柱によりても
の思ふ君

なき君のかたみとめづるなでしこに露もこゝろ
やはなれかぬらむ

久しう師の君を訪ひ参らせぬ頃柿に露へ
て

おもなしと思ふ心を柿の實の色にいでゝを君に
まみゆる

ある道すがら

ひさご酒ゆづつにかへてみやびをは紅葉さぐる
といでたゝすらし

酔なゝそぢにあまれる渡邊金太郎ぬしす
ゝめし柿なめづらかなりとて種をつゝみ
てもち歸らるゝとて(柿は八とせといへば
このなり出でむ日まで我體かなりや)など
笑ませつゝいはれければ

百とせの齡をたもつ君なればいく數ならじ柿の
八とせは

松村静枝の君うせましよみこのためすた
れたるみ寺を興しこたびまた供養の鐘を
鐘させて納めらるゝ由きよて

とこよまでひゞかざらめや子を思ふ心ひとつを
こめし鐘のね

筑波山の麓にて鐘いさせ給へる由その様
きへ思ひうかべられて

うつし世のたへぬ思ひもいる鐘の炎のうちにや
きつくすらむ

静枝の君のため師の君にみ歌こひけるに
この道好める君達のさへたゞ僅かの日數
のうちにあまた集めてたまへるがいと
るはしき調べのみなるに

鐘の音のうてばひゞける心地してともの調べの
こゑぞたへなる

龜の舎につどへる友の歌を集めし舞子を
龜の一むれと名づけてそが中に己れのも
入れられしを陸奥伯よりたまはりければ

あはれこの名なし小草もあめつちのめぐみにも
れぬ春ののべかな

しばし歌風ふこと忘りし間に報いはあら
はにていくたび口ずさみても思ふやうを
らぬにわびしくて

とりかへすよしもあらぬか忘りのこまひきなづ
むしきしまの道

歌のまた少しづつ浮びいづるやうなりぬ
るに

聲うとき小田の蛙もらたぶくろひらきそめたる
ことぞうれしき

いたつけるころ

かひなくも病めるわが身かいとし子をか抱く
さへ力なくして

無着尼の君へ

世のさがと今日も魚釣る海人の子は和歌のうら
わによるすべもなし

若き妹背のよなくのすきびに合はさるゝ
糸竹の音のかよひきにければ

つまごとの音にふきあはす笛竹のうきふし知ら
ぬ仲にやあるらむ

琴の絲をしめつゝ

いとほしと朝夕めづる琴の緒のみづら結ふさへ
樂しかりけり

「誰にみよとの心なるらむ」の上の句を

人目なき入江のかにのあしでがき誰に見よとの
心なるらむ

虫の名どもをこゝろくによめとありけ
れば

足おそく見ゆるもあはれわらじ蟲いづこへ急ぐ
たひ路なるらむ

これのみは許すべしやはものゝ命たつこと難き
わが身なれども

折にふれて

思ふこと見ること歌にいひすてなば心の鏡かけ
ものこらじ

ある折

兄がのる竹のみ馬のともびと、赤き、ぬきしい
もと添ひゆく

岩

そゝり立つ大き岩が根たちからの神の御手もて
据ゑにけらしも

みこ失ひし人に

身にかへてめではやしつゝ、離たじとあらがひけ
むをあはれその玉

わが畑などいつも心にかけて耕しつゝ十
年あまり親しみし渡邊金太郎翁にはかに
失せられしかば悲しまれてかの人の跡を
おかれし大根の指の長さほどになりしを
見て

もえいでし大根さや豆なき人のかたみに見むと
思ひがけさや
よき種を田畑のみかはこの世にもまきつる君が
のちの世しのばゆ

苔

いつしかもつる心やふれしむすびつる石井の水
に苔のうかべる

ある日

家うちはさ身のけはひしていざさらば旅ゆかへ
らむ君をまたまし

牧野まさ子の君につれて小音の謠をうた
へるに御しらべを御しらめとよむがなか
しくて笑ひくづれつゝ後にて

あまりにもをさなき友の心よと君やしらめにと
がめますらむ

さびしき道を夜ゆくに誰が家のかたゞ
足許にて犬の吠ゆるに驚きつゝ

ぬしまるる心はしれどさばかりに夜道の犬よわ
れなどがめそ

まさ子の君がひとり北海道にかへらるゝ折

かしのみのひとりの友の鹿島立ちまもれや御神
くがにうみ路に

雨の日鷄のひなに餌をやるとて

ぬれつゝも待つ鷄の子にいざさらば雨のふりせ
ぬ餌をやらまし

受をすうるにいと熱きに堪へかねて

つらくとも忍ばむものかさしもぐさもゆる病の
根のたえぬまは

篠つくばかりなる雨の最中に家踏たどり
て

かへらむの心といづれまさるやと降りくる雨の
あしに競はむ

今日しも腹痛を覺ゆるに産屋にこもりて

今宵かもあすかもわが子月みちて生れや出づら
む光ある世に

その夜男子生れいでぬ折しも筆とりませ
る夫の寶といふ字書かむとする折なりけ
ればこの子の名を寶とやせむなどいはれ
ける折思ひつゞける

しろがねに黄金にあらずわがものとめづる寶は
こだからにして

産屋のうちにて

くれなるの吾子が面かなうちきせしこぞめのき
ぬに色かよふまで

よるひるのけぢめわかれすみどりごとともに産
屋にこもるこの身は

妾が産後三日といふに五つになれる子の
はしかにかゝりて室をへだてて、打ち臥し
ぬるに心のみ通へどもみとりせむ術だに
なし

病める子の心なぐさにはらからの歌ふかあはれ
春のしらべを

たらちねの母はこもりぬいとし子をいとしとみ
とる人もなくして

ちごを海となづける、日

まことてふふしを心に吳竹のこのみどり兒よ世
にはたゝなむ

のぞけくもゆあみすまして乳をのみて思ひなげ
なるみどり兒のさま

母の來まさむことあまりに遅かりしかば

ゆくりなきこともある世と思ひいでゝつとふた
がるゝわが胸のうち

あれいでしちごはみ山のねぶの花そへ乳のつゆ
に早もねむりぬ

今日も尙かきこもるやととひがほに枕おとなふ
鶯のこゑ

ほぞの緒のとれにしあとのすぐれぬに物
思はれて

數ならぬ事ぞと人はいふらめど子故に迷ふ身ぞ
やるせなき

大君の御船にのりていで立ちませると見
し夢のうちにくたへる

天地のかひある今日の御幸ぶね棹とる人の面も
晴れたり

同じ夜の夢に歌物語を人の贈られけるを
そのまゝに見ずてさめにければ

浦島の箱にはあらぬことのはをひらかでやみし
ことぞくやしき

乳の出遅しきは心落ちぬぬにやいかで眠
らましと思へば思ふ程まなこさゆるに

板びさし月もるやどにあらねどもねられぬ夜半
のかずもそふかな

千鶴子の櫻を折りて早やこれ恙に咲きぬ
とて来て来にければ

わがためはうれしけれども咲き初めし庭櫻花折
りなやつしそ

朝鳥しづかになきて曇り日の空もあけぬと告げ
渡るかな

かきこもる身はのどけしやなかくに思ひたえに
し春の山ぶみ

秋の夜たちぬひしつゝよめる

つゆじもの 秋のこの夜を 長しとはたれかう
たみし 寝ざめすと 誰れかなげきし かすなら

ぬ 身にも敷そふ いとし子の 母としなれば
咲き匂ふ 野邊のちぐさの 花すりの たもと
ならずも 雁の鳴く 夕ぐれさむき 風をしも
身にしませじと みどり兒の 添へ乳はなれて
夜なくに たち縫ふころも とくとのみ 思ふ
こゝろは とる針の さき急がれて 月のごと
心ぞさゆる かくばかり 惜しきこの夜は
我がたのむ たなれの糸の いとながく ふけ
すもあらなむ われのみ に ねよとの鐘も ひ
びかざらなむ

反歌

かねならで寝ざめしちごが泣く聲にしばしそへ
ちの枕をぞとる

いなづまの 心も速き みやこ人 いむれつど
へる 市中の くるまのうちからくしも
所しむれば あとべより 乗りこしおうな ひた
ひには 波のしわより ゑびのごと 腰はまが
りぬ そが上に 背におへりしは 小山なす
萌黄のつゝみ そがまへに かき抱けるは み
なのわた かぐろきつゝみ あはれそも いづ
この人ぞ あはれそも 誰が母刀自ぞ はたや
また 老いて浮世に かしのみの ひとりやの
こる かにかくに 思ひやりつゝ こゝへとて
立たむとすれば あやにくに なやめる足の

いとゞしく 痛きが上に われもまた 膝に
のせたる 玉くしげ 二つの重荷 あなくるし
我が身にかはり あはれ知る 人もありやと
をぐるまの 中見わたせば あらがねも ひ
しぐばかりの あら男子おとこの こゝをわが世と
ひとりして 二人のむしろ いや廣く しむる
もあれば あるはまた いとも安らに 夢のく
に たどるもありて 我れ立ちて かはらむと
いふ 人もなきかも

反歌

をぐるまにゆられくすべをなみたふれぬべく
も見ゆる老びと

昭和九年二月五日印刷
昭和九年二月十日發行
定價金壹圓

著作權
所有

著者 比田井元子
發行兼印刷者 田中雄太郎

東京市澁谷區代々木山谷町
三百八十八番地

發行所 書學院後援會
電話四番五二三九
東京四七七一

終

